

大学拡張と新聞社

—大阪朝日新聞社の叡山講演会—

University Extension and Newspaper Companies:

Eizan Public Lectures by The Osaka Asahi Shimbun

山本 珠美

Tamami YAMAMOTO

1. はじめに

明治期を通して新聞は社会教育において重要な役割を果たしてきたが、日露戦争後には帝国大学教授たちの論説が新聞紙面に頻繁に載るようになり、さらに、彼らは新聞社が主催する通俗講談会の場に登壇するようになった。アカデミズム（大学）とジャーナリズム（新聞社）の共生関係に基づく社会教育（通俗教育）の始まりである。明治40年前後は、明治20～30年代に行われていた、帝大教授らが学術を一般公衆に平易に語る「通俗講談会」が、日露戦争で（一部の時局講談会を除き）中断された後の空白の時代だった¹。日露戦争を経て発行部数を伸ばした新聞社は、戦争終結後の新たなコンテンツとして大学に目を向け、通俗講談会を相次いで実施した。これらの事業は、「大学拡張（University Extension）」概念が定着する過程において重要な役割を果たした（山本2022、2024）。

新聞社主催の通俗講談会としては、読売新聞社が東京と甲府で実施した通俗学術講演（談）会（明治39年2月、5月、10月）、大阪朝日新聞社（大朝）の叡山講演会（明治40年8月）、大阪毎日新聞社の北陸巡回講演会（明治41年7月）が、初期の事例として挙げられる。中でも大朝の叡山講演会は、明治40（1907）年8月1日から17日までを三期に分け（第一期：1～5日、第二期：7～11日、第三期：13～17日）、比叡山延暦寺を会場に、講師総勢28人（京都帝大教授13人、東京帝大教授5人、陸海軍4人、その他6人）によって行われたもので、日数、講師数において、他社と比較にならないほどの大規模な講演会であった。大朝の各社史を見ると、叡山講演会は日露戦争後における特筆すべき出来事として記されており、例えば、『五十年の回顧：大阪朝日新聞創刊五十周年記念』には、次のように述べられている。

明治四十年の夏八月京洛鎮護の名山といはるゝ叡山の文殊楼、そこから見晴らかす琵琶湖の水色、溪谷に湧く一陣の涼風に夏を忘れて、学者の説に心耳をすまして聞かうといふのである

から、すばらしい青年の歓迎を以て終始された。期間を三分して総計六百三十八人の学徒は、聴講に、運動に、瞑想に、交遊に、定められた期間の学修ををへて無限の感謝を抱いて山を下ったのであるが、この会に参加し得なんだ多くの人々のために本社は叡山講演集を刊行したのであつた〔。〕この叡山講演会の与へた波動は相応に広く後年各地で開催さるゝ夏期大学の範をたれたものと見られるのである（朝日新聞社1929：182-183）²。

明治末期、大阪と東京の両朝日新聞社は、「文化の先兵」（朝日新聞社社史編修室編1969：488）として、叡山講演会以外にも、ロセツタ丸満韓巡遊（明治39年）、世界一周会（明治41年、43年）、朝日講演会・地方巡回朝日講演会（明治41年、44年、45年）など、元来の新聞発行に加えて様々な事業を主催していた。それらは「一つは日露戦争後のわが国民に世界的視野をもたせるもの、他はそのころ欠けていた成人教育を補って一人一人の国民の学識を高め、あわせてわが国民の質的向上に資するもの」（同上）であった。しかし、叡山講演会は誰が発案し、なぜ開催地を比叡山としたのか、等々、企画・実施に関する具体的なことは詳らかではない。

そこで本稿では、叡山講演会の実態、実施経緯、意義を、『大阪朝日新聞』（『大朝』）³の記事および『叡山講演集』等から明らかにし、大学拡張概念の定着過程におけるジャーナリズムの役割を再度検討する。

2. 講演会場について：比叡山延暦寺の山上宿院

叡山講演会の特徴は、規模の大きさに加えて、会場を延暦寺とした点にある（以下、『大朝』明治40年7～8月の記事を引用する際は、煩雑さを避けるため、引用文後のカッコ内に月日と頁数のみ記載する）。

延暦寺は滋賀県と京都府にまたがる比叡山（標高848m）に位置する天台宗総本山で、1700ha（500万坪超）の広大な境内地に点在する約100の堂宇の総称である。風光明媚な避暑地⁴であるが、聴講者の利便性を考えれば、大阪市内（あるいは京都市内）で実施の方が良いはずである。大朝はなぜわざわざ交通の便の悪い比叡山を会場としたのだろうか。

大朝は叡山講演会を「利益と娯楽とを一挙兩得する者」（7.20、p.1）として実施すると述べている。利益は講演から得られる知識であるとして、娯楽とは何か。『大朝』のコラム「天声人語」によると、「例年西洋人は天幕生活を営み東では軽井沢、西では比叡山、白雲青苔の裡に、或は読み、或は遊び、一年の塵事を忘れて延命の計を為す」のに対し、「日本人は温泉に寝転んで、身体を海鼠の如くし、更に心身の健剛を図る所以を知らない」、そこで「故らに不便なる叡山を選び、同志を此の地に集めんとする」（以上、7.22、p.2）ことにしたという。大津市側、京都市側、どちらから登るにせよ、当時は坂本ケーブルも叡山ケーブル・ロープウェイも開設以前であり、自らの足で登山するしかない。東西碩学の講演を聴きつつ、登山や各種の運動（3（4）で詳述）で心身を鍛錬するなら、比叡山こそが適切な地と考えられた。

①夏期の一定期間に、②風光明媚な避暑地で開催する、③講演と娯楽との組み合わせによる講演会、と言え、帝国大学や高等中学校（のち高等学校）、私学の宗教系学校・法律学校等々の学生を中心とする基督教青年会の夏期学校（明治22年～）⁵や仏教青年会の夏期講習会（明治25年～）⁶などの前例があり⁷、これらの先例に倣ったという一面はあるだろう。

そして、延暦寺には宿泊を伴う長期の講演会を開催するために適した会場があった。「東塔」と呼ばれる延暦寺発祥の地（根本中堂を中心とするエリア）に位置する「山上宿院」である（図1）⁸。

山上宿院は、『大朝』に「旧天台宗学校」「旧天台宗大学林跡」「旧天台宗大学寮跡」と書かれてあり、元は明治6（1873）年、比叡山上に置かれた比叡山総覺、のち、比叡山大学林（明治31年天台宗西部大学と改称）、比叡山中学林の建物（二階建）であった⁹。明治37（1904）年3月1日時点で大学に15名、中学に83名が在籍していたが¹⁰、明治38（1905）年3月に教育の便を図って山上から山麓の坂本に移転することが決議され、明治39（1906）年6月に新校舎竣工、同年9月に開校式が行われた¹¹。叡山講演会の5ヶ月前、明治40（1907）年3月に比叡山に詣でた高浜虚子が、「学寮は坂本の方に移つたので、其あとは講中の宿院に宛てゝある」（高浜1908：149）と述べたように、山上に残された建物が山上宿院となった。

広さについては、「旧大学寮時代には此の校舎に常に百四五十名の学生を収容し居りたり」（8.11、p.14）とあり、聴講者200人を収容することも可能であった。

便利の事には旧天台宗学校の其の儘我が講演会に供せらるゝあり、其の間取りは写真版 [略] の示す通りにて、総数六十五間あり、之に講堂もあれば、湯殿もある、中廊下にて至極便利好く出来たるものなり。此の外今一棟ありて、間取りも同様に出来居れり、若し叡山山上此建物なければ、大仕掛の講演会も出来ぬ訳、然るに都合よく此建物あり、一時に二百名の聴講者を収容するを得る所以。斯る間取りなるを以て、一室に合宿を要し、約畳二帖に一人位の割となる、窮屈の事は勿論なるが、畳等は今度本社より修復し了りたり（7.27、p.3；下線は筆者）。

講演会の企画が先か、会場選定が先か、詳細は不明であるものの、「若し叡山山上此建物なければ、大仕掛の講演会も出来ぬ訳」とあるように、延暦寺に適した会場があったことは講演会を実施する上で重要であった。記事によると、大朝は講演会実施のために畳の修復を行った。

なお、講師の宿泊については、山上宿院とは別に、龍珠院（8.3、p.3）や教王院（8.11、p.13）など、付近の寺院が手配された。また、大朝社員の宿は、根本中堂南東脇の大黒堂が当てられた（8.19、p.3）。

山上宿院は大朝の叡山講演会の後も、関西仏教青年会第15回夏期講習会（明治41年7月）、滋賀県教育会主催叡山講習会（大正4年8月）、国産奨励会主催夏期林間講習会（大正7年8月）、京都府滋賀県岐阜県聯合幹部青年講習会（大正12年7月）、大日本山林会林業講習会（昭和4年7～8月）等¹²、明治末期～昭和戦前期にかけて、各種講演会・講習会の会場として使用された¹³。



図1 山上宿院（延暦寺山上事務扱所檀信徒宿院）
 [出所] 赤松円麟『比叡山写真帖』延暦寺事務所、1912年
 国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/819737> [2025年11月10日最終閲覧]

3. 叡山講演会の実態

(1) 概要：日程と講師

ここからは叡山講演会について、明治40（1907）年7月20日から8月21日までの一ヶ月間、毎日掲載された『大朝』記事に基づき、その実態を見ることとする。

7月20日、『大朝』一面中心部に、夏期休暇を利用して比叡山にて大講演会を開くという広告が大々的に掲載された。開催理由は、次のとおりであった。

現代學術の勃興は、前古に比なし、大学は兩地に隆々として、偉才は一時に濟々たり…（中略）
 …但学府は中央にありて、四方篤学の士、其の風采に接し其の緒論を聴くを得ず、各地時に講演会の設あるも、亦一二学博を聘するに過ぎず、嘉恵の未だ遍からざるは、士林の憾事たり、我が社乃ち学界の要求を察し、今夏を以て東西二都の学者及び陸海軍の兵学家を礼聘し、四方の俊髦を麾きて、共に一堂の中に会し、大家の講論を聴きて、後学の心胸を開き、以て昭代奎運の盛を鳴らさんと欲す [。] (7.20、p.1)

學術は勃興し、東京・京都に大学はできたが、教授らに接して話を聴くことは容易ではない、そこで東西二都の学者と陸海軍の兵学家を招いた講演会を開催することにした、という。記事の末尾には京都帝大教授・講師14人、東京帝大教授3人に、三宅雄二郎、志賀重昂、内藤虎次郎を加えた総勢20人の講師の名前が列挙され、未定ではあるが陸海軍からも講師を招聘することが記された（翌日の広告には東京帝大教授1人が追加された）。陸軍講師2人は27日に、海軍講師2人は30日に決定し、7月末時点で講師25人が確定した¹⁴。通俗講談会は明治10年代から各地で実施されてきたものの、一度にこれほど大人数の講師を集めたものはかつてなかった。

なお、25人うち池邊義象（京都帝大法科大学講師）が病気のため欠講となり（8.1、p.3）、後日、今村有隣、デビス（Jerome Dean Davis）、新渡戸稲造、南條文雄の4人が追加され¹⁵、最終的に講師は28人となった。講師の名前、所属・肩書、演題、登壇日・順については表1のとおりである¹⁶。

表1 叡山講演会の講師

氏名	所属・肩書(2)	演題(3)	第一期					第二期					第三期				
			1日	2日	3日	4日	5日	7日	8日	9日	10日	11日	13日	14日	15日	16日	17日
足立文太郎	京都帝国大学医科大学教授 医学博士	日本人と西洋人／頭の形日本人種／ 塵塚の研究	PM1	AM3	PM1	PM1	AM1										
松岡 道治	京都帝国大学医科大学教授 医学博士	人体を透視する方法／如何なる病気が 最も惨酷なるや／生と死／吾人は天然 の賜物を如何に応用すべきや	AM1	AM1	AM1	AM1											
青柳 榮司	京都帝国大学理科大学教授 工学博士	電気工学及其応用	PM2	PM													
仁井田益太郎	京都帝国大学法科大学教授 法学博士	法律の観念	AM2														
松本文三郎	京都帝国大学文科大学教授 文学博士	印度の聖人／世界に於ける印度（上・下）		AM2	AM2	AM2											
末廣 重雄	京都帝国大学法科大学教授 法学博士	万国平和会議の由来／第一平和会議／ 第二平和会議			AM3	AM3	AM3										
内藤虎次郎		日本満州交通略説（上・中・下）			PM2	PM2	PM1										
今村 有隣	元第一高等学校長	仏蘭西学					AM2										
芝生佐市郎	陸軍省軍務局詰 陸軍工兵少佐	軍事雑話					PM2										
和辻 春次	京都帝国大学医科大学教授 医学博士	五官の嗜好／嗜好としての感情／ 嗜好としての変化／難聴ある学齡児童 を如何に処置すべきや						AM1		AM1	PM1	AM1					
佐藤鐵太郎	海軍大学校教官 海軍中佐	海と日本（上・下）						AM2	PM1								
井上 密	京都帝国大学法科大学教授 法学博士	国家の種類及其利害						PM									
荒木寅三郎	京都帝国大学医科大学教授 医学博士	生体を構成せる元素（一～四）							PM2	AM3	AM3	AM3					
松村 任三	東京帝国大学理科大学教授 理学博士	英国人の人格／牡丹餅の説／高等植物 と劣等植物							AM3	AM2	AM2						
白鳥 庫吉	東京帝国大学文科大学教授 文学博士	韓史概説／韓国の建設／朝鮮と日本及 び大陸との関係							AM2	PM	AM1						
坂本 則俊(1)	海軍教育本部附 海軍少佐	海軍概況（上・下）							AM1	AM4							
隈 徳三	近衛師団経理部長 陸軍一等主計正	陸軍経理の現状一斑（上・下）									PM2	PM1					
井上哲次郎	東京帝国大学文科大学教授 文学博士	松下村塾を觀て感あり										AM2					
デビス	同志社教授	日本に於ける青年の義務										PM2					
三宅雄二郎	文学博士	山上の聯想										PM3	AM1	AM2			
勝本勘三郎	京都帝国大学法科大学教授 法学博士	ベルチヨン氏の個人調査に就て／ 新刑法一斑											AM2	PM2			PM
志賀 重昂	農学士	地形と人文（上・下）											AM3	AM1	AM2		
三上 参次	東京帝国大学文科大学教授 文学博士	国史と叡山											PM				
田島 錦治	京都帝国大学法科大学教授 法学博士	労働問題（上・下）												PM1	AM1		
狩野 直喜	京都帝国大学文科大学教授 文学博士	支那地方制度（上・中・下）													PM2	AM2	AM1
新渡戸稲造	第一高等学校長兼 東京帝国大学農科大学教授 農学博士・法学博士	農業の起源														AM3 PM1	
岡村 司	京都帝国大学法科大学教授 法学博士	相統の話（上・下）														AM1	AM2
南條 文雄	文学博士	老子の三宝														PM	

出所：『大朝』明治40.8.2～8.18、『叡山講演集』より筆者作成。

注：(1)『大朝』記事では坂本、『叡山講演集』では阪本となっているが、『官報』『職員録』等で確認の上、前者とした。

(2) 所属・肩書は講演時点。佐藤鐵太郎は『叡山講演集』では海軍大佐となっているが、明治40年9月28日に大佐に昇進したため、講演時点では中佐であった。

(3) 演題については、『大朝』記事に表記の揺れが多数みられるため、『叡山講演集』に従った。ただし『叡山講演集』に講義録の掲載がない今村有隣とデビスは『大朝』記事による（8.6、p.3；8.12、p.3）。

(4) 登壇日・順は『大朝』記事による（『叡山講演集』は編集の都合上「数日間の講演を一題の下に纏むる」（小池編1907：序4）こともあり、記載された日と実際の講演日が異なっている場合がある）。「AM1」は「午前部の第一席」を示す（数字が入っていない場合は担当1人）。

講演会規定により、各期の聴講者は200名であること（原則1人一期限り）、希望者は往復はがきで申し込むこと、聴講許可が得られたら一期分2円50銭（食費寝具料）を払うこと等が定められた（7.20、p.3）。反響は大きく、5日後には第一期から第三期まで全て満員となった（7.25、p.3）。聴講許可者には各期とも前日午後5時までに会場に到着するよう伝えられた（同上）。

講演会が始まると、『大朝』には毎日、講演・娯楽等々について詳細に報じられたが、会期中の

一日のスケジュールは、おおむね、朝食／午前の部（朝8時から正午、講演2～4人）／昼食／運動／午後の部（午後4時から6時¹⁷、講演1～3人）／夕食／夜の部（午後8時～、主に余興）であった。講演時間は講師によって異なり、1時間で終わる場合もあれば、4時間におよぶ時もあった。食事は「伝教大師以来の宗禁」（7.24、p.3）で精進料理であったが、「副食物に滋養品を取る為、諸種の缶詰使用は差支なく」（7.26、p.3）、また、「新鮮なる鶏卵もあり牛乳は毎朝配達せられ山上生活としては先づ贅沢と謂はざるべからず」（8.11、p.13）とのことであった¹⁸。

（2）多士済々の講師たち

『大朝』記事の内容は細部にわたっているが、講師の話しぶりなどの人物描写がとりわけ詳しい。内藤虎次郎は「考証該博聞くものをして何れも其の博聞に驚かしめ」（8.5、p.3）、京都帝大法科大学教授末廣重雄は「論理整然、贅語がない」（8.5、p.3）、東京帝大文科大学教授白鳥庫吉は「脈絡系統、一糸紊れず」（8.11、p.3）、そして志賀重昂は「朗々たる大音声は、さしもの講堂をユラユラと動かさんばかり、そんじよ其所辺の青瓢筆を、吹き飛ばしさうで有つた」（8.14、p.3）と評された。

京都帝大法科大学教授井上密の講演は特に熱の入ったものであった。

正味四時間打ツ続けに一分一時の休息もせず西欧諸学者の国家の分類法を説明批評し博士得意の弁説を以て縦横無尽に各種国家の優劣利害を論壇し極めて解し易き譬喩例證を引用し会員〔筆者注：講習会員＝聴講者〕の総ての頭脳に生嚙りの民主論は危険の甚だしきものだ多数決は要するに愚決なるものだなど君主国と共和国との利害に就きて大気焔を吐き…（中略）…此の古今未曾有の大演説を息を継がず遣るもやつたり聴くも聴いたり講師の熱心と会員篤学の真情とは到底下界の人には想像もされまい（8.8、p.3）

滑稽交じりの話術で注目された講師もいた。第一期の5日間毎日講演を行い「第一期の愛嬌を一人で背負て立つた」（8.6、p.3）京都帝大医科大学教授足立文太郎は、その話しぶりが聴講生たちに大人気で「博士が登壇したかと思ふと、モウ満堂の笑声破るゝが如し、階下に居てもハゝゝ足立サンだなど直ぐに解かれり」（8.11、p.13）と描かれた。東京帝大理科大学教授松村任三は、数ある講師の中でも特に注目の一人として、事前の報道ではその植物学講演に期待が寄せられていたのだが（7.24、p.3；7.28、p.3）、いざ始めると「自分は元来専門が大嫌ひである、専門程苦しいものはない、迂かとなると植物職人扱にされると笑はせ」（8.9、p.3）、初日は「英国人の人格」、二日目は「牡丹餅の説」という専門外の話で「破るゝばかりの拍手」（8.10、p.3）を浴びた。三日目の「高等植物と劣等植物」でようやく専門の話となったが、「常に諧謔を交へてあかしめず而も専門的智識を最も面白く聴聞せしめられた」（8.11、p.3）という。

これらの多士済々な講師陣の中で最も注目を集めたのは、「暑中休暇を利用し、旅順行の企てありしを、本社講演会の為、旬日間之を延期し、叡山絶頂に於て電気実験を行はるゝこと」（7.29、p.3）となった、京都帝大理工科大学教授の青柳榮司であった。実際の講演は、一日目が「各式の発動機や、交流直流の発電機、又は電燈の種類を置いて、実物に就て説明」があり、二日目は「専ら電力、

電気熱、電気通信に関する講演で、水力及び火力の事から、電車に関しては図解の外に、実物の模型があつて、蓄電機から電気を送ると、講師の足許でシイメンス式電車が運転を始める」（以上、8.5、p.4）という大掛かりなものであった。とりわけ二日目の夜は相当な盛り上がりだったことが、以下の記事からわかる。

夜に入つてからは電流の実験と、彼のX光線の実験が始まる。これは昼よりは一層花々敷いものであつた。講座の卓上には真空管や燐光管の各種、又は感應コイルなどが所狭く置かれて、天井からは玉簾のやうに、ガイスレル管が吊されてある。先づ燈光を減し、青柳博士指揮の許に、京都島津製作所員の松島安次郎氏が説明の任に当り、二名の助手と共に電気を送ると、真空管は真空の度合に応じて、五彩燦然と闇を照し、中にもガイスレル管の光りを放つた時は、叡山だけに霊花一時に開いて、三十二相の御仏影向ましますかと疑はれ、多くの会員は思はず喝采する。其の他電光を発する車の火花や、真空管及び燐光管を電流に触れしめて光を発し、又其の管を会員に持たしめて、三人五人手と手を繋ぎ合せ、猶電流の通ずる工合などを示し、之も中々の大喝采であつた。

最後は会員待兼のエキシス光線にて、手を出すもの腕を出すもの、果は青柳博士の財囊までも映されて、私のは紙幣が多く入れてあるから、銭は至つて少いと変つた説明もある。加之に参観に来てゐた松岡医学博士¹⁹までが引つ張り出され、医学上より見たるX光線、否同博士の云ふレントゲン放射線の説明があつて、開会此のかた斯く講場の賑つたことはない（同上）。

青柳はこの他にも、電気炉、電気マッチ、電気布団、電気湯沸、等々を披露したが、これらは島津製作所が「我社の壮挙を賛し、蓄電池を始め諸種の機械を供給」（7.29、p.3）することとなつたためである。機械類一式を山上に運んだのは「例の大原女式の女人夫三十余名」で「各自に頭へ荷物を載せ一列になつて静々と乗込んできた」（以上、8.2、p.3）という。

これらの電気実験は大変な人気を呼んだため、第三期の8月14日、15日にも島津製作所の所員が比叡山に登り、X光線や無線電信、等々について実演した。『大朝』は「万事不便極まる山上に於て、斯くも有益な而も大々的な実験をして呉れた島津製作所の好意は、改めて茲に感謝せねばならぬ」（8.17、p.3）と感謝の意を表した。

（3）誰が聴講したのか：聴講者名簿から

新聞社主催にせよ、大学主催にせよ、通俗講演会の聴衆が具体的にどのような人々であつたかを明らかにすることは難しい。叡山講演会の前後に開催された読売新聞社の通俗学術講演会、大阪毎日新聞社の北陸巡回講演会、いずれもその属性は明らかではない。しかしながら、叡山講演会の場合は、既述のとおり事前申込制であり、聴講者（正しくは申込者）640人分²⁰の氏名・住所・職業が、期毎に一覧となつて『大朝』に掲載されたため、どのような属性の人が聴講したかを知ることができる。

まずは住所から見てみよう（表2-1）。「西より東より聴講の申込引きも切らぬ」（7.24、p.3）

と報じられたとおり、東は栃木県、南は沖縄県まで28府県にわたった。三期いずれも最多は大阪府で計231人、全体の36.1%を占めている。次に多いのが兵庫県で計101人(15.8%)、三位と四位は期毎に変わるが京都府または滋賀県で、三期通すと三位が京都府で計91人(14.2%)、四位が滋賀県で計81人(12.7%)である。これら近畿の2府2県で計504人(78.8%)、奈良県・和歌山県を含めた近畿全体では計537人(83.9%)と、近畿在住の聴講者が圧倒的に多いことがわかる。近畿以外では東海35人(5.5%)、中国29人(4.5%)と比較的近いエリアが多く、四国15人(2.3%)、北陸・甲信越12人(1.9%)、九州・沖縄8人(1.3%)、関東3人(0.5%)と遠くなるほど少なくなり、北海道・東北からの聴講者はいない。近畿以外で聴講者が二桁を超えた県は、岐阜県(16人)、岡山県(15人)、三重県(13人)、香川県(11人)の4県である。

続いて職業である(表2-2)。「官吏あり、教員あり、実業家あり、名望家あり、医師あり、学生あり、千種万様」(7.24, p.3)と報じられていたが、三期いずれも最多は教員で計166人(25.9%)、次に多いのが学生で計121人(18.9%)であった。教員と学生で全体の44.8%を占めていることがわかる。教員・学生に次ぐのが、三期計で、実業63人(9.8%)、商業37人(5.8%)、官公吏36人(5.6%)、会社員等32人(5.0%)となっている。一方で、農業は計28人(4.4%)であり、当時の産業別人口比を考慮するとその割合はかなり小さい²¹。また、神職や宣教師を含めた僧侶等は計23人(3.6%)であり、そのうち比叡山の僧侶(住所が叡山で職業が僧侶の者)は第一期の7人と僅かであった。弁護士や医師等の専門職をはじめ、記者、軍人、議員等、郵便局長はいずれも極めて少ない。なお、無職業は実業に次いで多く、58人(9.1%)であった。

職業別では教員が最多という状況は、3年後の明治43(1910)年8月に京都帝大で夏期講演会が行われた際にも見られる傾向であった(山本2020:174)。京都帝大夏期講演会の場合、証明書授与者414人のうち252人(60.9%)が教員であり、圧倒的多さが目立つ。そこに学校生徒48人(11.6%)を加えると、教員と学校生徒で7割を超えていた(教員、学校生徒以外では、実業家53人(12.8%)、官公吏35人(8.5%)など)。それに比べると、叡山講演会の場合、4分の1を占める教員は確かに多数ではあるものの圧倒的というほどでもなく、職業は比較的多岐にわたっていたと言える。

聴講者はすべて男性であった。比叡山の女人禁制は明治5(1872)年に解除されており、「婦人連の申込少からず、或は団体を組み申込まるゝもあり」(7.24, p.3)と申し込み自体はあったのだが、「然れど婦人連に対しては本社は遺憾ながら謝絶し居れり、元来の設備が男子に向つて専らなればなり」(同上)と、設備が整っていないという理由で女性は聴講を拒絶された。この点について、講師の三宅雄二郎と一緒に比叡山を訪れた妻の三宅花圃は、以下のように述べたと報じられている。

自分は少くも十人位の婦人が居らるゝつもりで登つて来ましたが、皆男の方ばかりと聞いて非常に心さびしく思ひました…(中略)…新聞社の方に何故女はと聞きましたが、設備や監督が面倒だからと仰せられます、折角の此お催しに女の与り得ないのは残念ではありませぬか(8.13, p.3)。

一覧表とは別に、聴講者の最年長と最年少に関する記事も掲載されている。第一期の最年長は徳

鳥県・小間物業の58歳、最年少は三重県・学生と兵庫県・学生の15歳であり、二人とも父または兄と一緒に参加だった（8.2、p.3）。第二期の最年長は大阪府・質業の62歳、最年少は滋賀県・学生の16歳であった（8.8、p.3）。第三期の最年長、最年少に関する『大朝』の記事はないが、第三期講師の一人である志賀重昂によると、最年長は陸軍中將の内藤正明（62歳か）であった（志賀矧川「銷夏日記」『国民新聞』明治40.8.24、p.1）²²。

このように様々な職業・年齢の者からなる聴講者たちであったが、その態度は「何れも熱心にして多くはノートブックを携へ講話の要旨を摘記し又遠慮なく講師に質問を試み」（8.2、p.3）、「学問に熱心なる会員は最終の今日に至るまで聊かの情容なくノートを手にして講堂に端座して居る」（8.18、p.3）と報じられたように、初日から最終日まで熱意溢れるものであった。

表2-1 観山講演会の聴講者（府県別）

地区名	府県名	第一期	第二期	第三期	府県計 (割合)	地区計 (割合)
関東	栃木県	1			1	3 (0.5%)
	東京府	1			1	
	神奈川県	1			1	
北陸 甲信越	新潟県	1			1	12 (1.9%)
	石川県			2	2	
	福井県	4	1	3	8	
東海	山梨県	1			1	35 (5.5%)
	岐阜県	4	7	5	16	
	愛知県	1	2	3	6	
近畿	三重県	8	2	3	13	537 (83.9%)
	滋賀県	29	23	29	81 (12.7%)	
	京都府	26	36	29	91 (14.2%)	
	大阪府	78	84	69	231 (36.1%)	
	兵庫県	30	38	33	101 (15.8%)	
	奈良県	5	11	7	23	
	和歌山県	1	3	6	10	
中国	鳥取県	2	2		4	29 (4.5%)
	岡山県	5	1	9	15	
	広島県	3	1	4	8	
四国	山口県			2	2	15 (2.3%)
	徳島県	3		1	4	
九州 沖縄	香川県	4	2	5	11	8 (1.3%)
	福岡県	1		1	2	
	長崎県	1			1	
	熊本県		1		1	
	大分県	1	1		2	
	鹿児島県	1			1	
不明	沖縄県			1	1	1 (0.2%)
計		212	215	213	640 (100%)	

出所：『大朝』明治40.8.5、8.11、8.17より筆者作成。

注：記事の住所欄は、府県名、旧国名、または都市名が記載されている（例えば、兵庫県の場合、兵庫、播磨、淡路、神戸、姫路など）。表作成にあたり、全て府県名にした。なお、旧国名が複数の府県にまたがる「摂津」は大阪府に、「丹波」は京都府に便宜上統一した。

表2-2 観山講演会の聴講者（職業別）

	第一期	第二期	第三期	計	割合(%)
教員	59	47	60	166	25.9
学生	56	28	37	121	18.9
実業	16	19	28	63	9.8
商業	8	17	12	37	5.8
官公吏	11	12	13	36	5.6
会社員等	11	12	9	32	5.0
農業	6	10	12	28	4.4
僧侶等	13	6	4	23	3.6
弁護士	2	3	3	8	1.3
記者	2	5	1	8	1.3
軍人	1	3	3	7	1.1
議員等		4	3	7	1.1
医師等	2	3	1	6	0.9
郵便局長		3	1	4	0.6
その他	7	7	6	20	3.1
無職業	18	20	20	58	9.1
無記入		16		16	2.5
計	212	215	213	640	100.0

出所：表2-1に同じ。

注：記事の職業欄の表記は非常に多岐にわたっており、申込者が往復はがきに記載したものをそのまま掲載したものとは推測される。表作成にあたり、以下のとおりにとまとめることとした。なお、教員、農業、弁護士、郵便局長、無職業は記載どおり。

- ・学生：学生、大学生。ただし中学生2人も含む。
- ・実業：醸造業、呉服業、織物業など、モノづくりを担う「〇〇業」を含む。
- ・商業：商業、輸出業、仲買業、質業など、時計商などの「〇〇商」を含む。
- ・官公吏：官吏、公吏、収入役、助役、税務官、判事、書記、視学、等。
- ・会社員等：会社員、銀行員、取引所員、事務員、等。
- ・僧侶等：僧侶、神職、宣教師、等。
- ・記者：新聞記者、雑誌記者。
- ・軍人：軍人、陸軍大尉、砲兵大尉、海軍大尉、等。
- ・議員等：県会議員、市会議員、参事会員、村長、等。
- ・医師等：医師、歯科医、薬剤師。
- ・その他：上記に含まれない者。書家、技師、駅長、等。文字が判読不能の場合も含む。

(4) 山上の娯楽

叡山講演会では、「午前の講義が済むと、会員は四明、横川あたりに三々五々出かけるものもある、採取網を背負って昆虫採取と洒落の一連もある、庭球大弓などの運動場で午後四時の開演を待ち受けるもある」(8.3, p.3) と報じられたように、早朝、午前の講演と午後の講演の合間、および夜に行われた娯楽(運動、散策、余興など)が、聴講者・講師・大朝社員一同の楽しみとなっていた。

運動では、蹴球、バスケットボール等々の中、とりわけ人気を博した競技は根本中堂前の広場にコートが設けられた庭球だった。「今朝早く自分が出掛けて行くと、素川、蟹堂、霞庵〔筆者注：いずれも大朝社員。4で後述〕の三ピオンが会員と伍して旺んに闘つてゐる。其処へ龍珠院の講師宿舎から、足立博士と青柳博士も来て、大々的試合が開始せられた。足立博士克く打つ。青柳博士に至つては、慥にチャンピオンの値打がある」(8.3, p.3) と、皆で一緒に庭球を楽しんでいた様子が報じられている²³。その他、「学林時代に使用したもので、山法師式腕自慢の遺物」(同上)という大弓も人気だった。

全三期いずれも実施されたのは、琵琶湖と京都の眺望が得られる四明嶽への登山と戸田流光による薩摩琵琶の演奏であった。山上宿院のある東塔(標高約670m)から四明嶽(標高838m)までは片道徒歩40分程度であり²⁴、第一期・第二期はそれぞれ3日目の早朝に(ただし第二期は登ったものの視界不良だったため、翌日昼に再度登り直している)、第三期は初日の午後に登山が行われた。一方の薩摩琵琶の演奏は、各期とも夜8時から二夜にわたり行われ、「川中島」「台湾入」「吉野落」などの曲が演奏された。

その他、第二期には、聴講者有志数名が持参した珍書の展覧会(8.8, p.3; 8.9, p.3)や、東京帝大理科大学教授松村任三が講演の合間に同好者10数名を引率して実施した植物観察会で収集した叡山植物の陳列なども行われた(8.10, p.3; 8.11, p.3)。

各期最終日の夜には茶話会も開かれた。大朝社員が司会者を務め(第一期安藤鉄腸、第二・三期高原蟹堂)、その指名による聴講者の5分演説が行われたが、第一期の様子は以下のとおりであった。

是から指名の許に、会員が交る交る中央に飛出す。銀行員が出る、書家が出る、法律家が出る、僧侶が出る、教育家が出る、新聞社長が出る、神官が出る、学生が出る、詩人が出る、軍人が出る。雄弁家もあれば訥弁家もあつたが、何れも司会者の怪気焰にカブレ気味で、其の気焰の高きこと、比叡山を抜く更に幾千尺。その間々には薩摩琵琶をやるもの、講師連を穿つた狂句を読み上げるもの、新体詩を朗読するもの、落語をやるもの、論ずるもの、駁するもの。その昔し叡山の大講堂に各宗の僧侶が集つて、大論議をやつた時も、是れ程ではあるまいと思はれる(8.7, p.3)。

第二期、第三期の茶話会も同様で、聴講者・講師・大朝社員を交えて大盛り上がりの会となった。かくして、全三期、入替日を含み17日間にわたる叡山講演会は成功裡に終わった。

(5) 講義録刊行

叡山講演会閉講から一週間後、講義録の予約販売についての広告が掲載された。講義録刊行は、「此の講演を聴くもの聴かざるもの皆其の出版を望み、本社も亦此の有益なる講演の湮滅に帰せんことを惜み、更に他日の記念となさん為」に行うこと、また「本社の講演会開催の趣旨を守り、飽くまで公益を主とし、真の実費を以て」（以上、8.24、p.1）販売することとした。

広告は申込期日の9月5日まで毎日『大朝』に載せられ、「申込者忽ち一万二千の多きに」（小池編1907：序4）上った。『叡山講演集』は講演会から3ヶ月後の11月に刊行された。

4. 叡山講演会実施の経緯

(1) 鳥居素川と内藤湖南：通俗講談会開催を求めた二人

叡山講演会は、どういう経緯で企画・実施されたのだろうか。

『大朝』の記名記事から判明する限り、叡山講演会には次の大朝社員が同行していた（カッコ内は号。当時『大朝』では号が使用されていたため、本文でも主に号を用いる）²⁵。

全期間：鳥居赫雄（素川）、高原操（蟹堂）

第一期：小池信美（霞庵）、安藤正純（鉄腸）、根本房吉（吐芳）

第二期：石橋為之助（白羊）、原田棟一郎（夢龕）、松本幹一（晩翠）、一花健藏（一華）、吉田喜太郎（紫浪）

第三期：土屋元作（大夢）、後醍院正六（廬山）、金崎賢（杏葉）

全期間を叡山で過ごした高原蟹堂²⁶の回想によれば、ともに全期間滞在した鳥居素川が叡山講演会の「総司令」（大阪朝日新聞社整理部編1928：65）であった。鳥居は開会式・閉会式で社の代表として挨拶しており、重要な役割を果たしていたことは間違いない。鳥居とはどのような人物であったのか。

『朝日新聞の九十年』に「池辺三山・鳥居素川の登場」という見出しで、明治後期から大正期にかけて活躍した両者について述べている項がある（朝日新聞社1969：181-190）。池辺吉太郎（三山）は明治29（1896）年12月、鳥居は翌明治30（1897）年12月、一年おきに大朝に入社した。二人はともに熊本出身であり、大朝入社前には陸羯南の新聞『日本』に、池辺は客員として論説を掲載し、鳥居は社員として執筆していたという共通点を持つ。鳥居の大朝入社は池辺の推薦によるものであった。

池辺は大朝入社後、東朝との兼務を経て、明治33（1900）年からは正式に東朝に籍を移して専任となり、明治44（1911）年に退社するまで「事実上の主筆」（朝日新聞社1969：187）として『東朝』に論陣を張った人物で、「東京朝日新聞発展の立役者」（小宮2018：70）とされる。当時、関西において『大朝』は『大阪毎日新聞』との二強時代を形成していたのに対し、東京における『東朝』は

『報知新聞』や『万朝報』などの後塵を拝していた。池辺は群雄割拠の東京府下新聞界において『東朝』を有力紙に押し上げた功労者であった。一方、鳥居は大朝入社後、次第に頭角を現し、ドイツ留学や日露戦争での従軍記者を経て大正期には編集部長・局長となり、大正7（1918）年の「白虹」筆禍事件で退社するまでリーダー的存在として『大朝』で健筆を揮った。鳥居の評伝の執筆者である伊豆富人は「三山、素川東西相呼応して一致協力、朝日新聞の黄金時代を現出し、朝日新聞の社風を形成し、その基礎を確乎不動のものとした」（伊豆1962：247-248）と、両者を評している²⁷。

鳥居が明治32（1899）年に執筆した記事に「社会教育の必要」と題するものがある。

教育は必しも学校を待つべきにあらず、苟も以て人文の開発を援け、人性の陶冶に資するものは皆な教育の地存す。欧州今開明と称す、豈啻学校教育の整備を以て今日の盛を致したりと謂はんや、必らずや社会教育と相待て始めて完全なりと謂ふべし。

我邦の教育未だ整備したるものあらず。近時学校の設備を云々し、教員の不足を云々し、以て其奨励を図り以て其施設を全うせんと欲するも、未だ一言の社会教育に及ばざるは何ぞ。縦し学校の設備成り児童の就学者多きを加ふるも、其学校に学ぶもの幾干もあらずして其家庭及社会に学ぶものは最も多し（『大朝』明治32.4.14、p.2；傍点は原文どおり）²⁸。

鳥居は記事の中で社会教育が必要であり、その具体的方法として地方図書館や無月謝夜学校の設置と並び、通俗講談会の開催を挙げた。

鳥居は、明治34（1901）年から明治36（1903）年まで、念願のドイツ留学を果たしているが²⁹、後に英米独の「大学拡張」を著書で解説した教育学者の谷本富、溝淵進馬が文部省外国留学生だった時期と重なっている（山本2023：45-49）。鳥居はドイツ留学中、1年目はハレ大学、2年目はベルリン大学に在籍したが（富田2017：144-189）、「大学拡張」の動向について現地で見聞したという可能性は考えられる。

叡山講演会は講師総勢28人のうち13人が京都帝大教授であったが、鳥居は彼らとの個人的つながりを有していた。叡山講演会第三期に講師を務めた文科大学教授の狩野直喜は済々黉の一級上で「生涯の盟友」（伊豆1962：156）であったし、ドイツ留学中の学費の工面にあたっては総長の木下廣次の助力も得ていた（新妻1969：46-47）。

このように、鳥居は大朝内で有力なポジションにあつて、通俗講談会に対する意欲と必要な人脈を有しており、実際に叡山講演会では総司令という立場にあったことを考慮すると、叡山講演会の企画・実施にあたって主要な役割を果たしたことは間違いないと思われる³⁰。

もう一人、鳥居と並んで叡山講演会の実現の鍵になったと思われる人物として、大朝の元社員で講演会後に京都帝大に着任する内藤虎次郎（湖南）の名も挙げなければならない。内藤は、明治27（1894）年7月³¹に大朝記者となり、明治29（1896）年12月に一度退社、『台湾日報』『万朝報』を経て、明治33（1900）年7月に大朝へ再入社し、明治39（1906）年7月に退社した。退社後は大朝からしばらく名誉客員の待遇を受けていた（千葉1986：315）。その後、京都帝大文科大学長だった狩野享吉からの招請により、明治40（1907）年10月に同大講師となった。内藤は叡山講演会の第一

期で講師を務めているが、それは京都帝大着任二ヶ月前であり、狩野が人事に奔走している時期であった（千葉1986：313-317）³²。

内藤は、二度目の大朝時代の明治34（1901）年に、京都帝大に関して「京都大学図書館一覧記」（4月3日、p.6、号は「黒頭」）、「京都大学の文科」（8月8日、p.1）、「関西の文化と京都大学」（8月11日、p.1）、「京都大学と樸学の士」（8月14-15日、両日ともp.1）と4本の記事を書いている。このうち「関西の文化と京都大学」に以下のような記述がある。

吾輩はこゝに一言を附記して、京都大学の教授諸君に望む所の者あり、何ぞや、文科大学の設置と共に、関西文化の啓発に最も必要なるは、通俗講談の開設なり。十余年前、東京に於て、屢次一ツ橋の講義室に開かれたる通俗講談は、今廃絶に帰せりと雖も、而かも当時學術思想の啓発に至大の影響ありしを疑はず、関西の今日は、文化の程度に於て、豈に十余年前の東京に髣髴たらずや、此論猶ほ長し。異日更に諸君と細かに商推する所あらんとす（『大朝』明治34.8.11；傍点は原文どおり）³³。

大朝が叡山講演会を企画・実施する6年前に、内藤は京都帝大教授らによる通俗講談会の開設を訴え、そして自らが京都帝大に着任する直前には、古巣が主催する講演会に講師として登壇することとなった。内藤が京都帝大教授らと叡山講演会について「商推」したかどうかは定かではないものの（「商推」は「比較して考えること。あれこれはかつて決めること。相談してはつきり決めること。」の意）、大朝と京都帝大とをつなぐ役割を果たした可能性は考えられる。

鳥居、内藤、両者ともに大朝内で主要な役割を果たしていたこと³⁴に加え、以前より通俗講談会の開設を望んでいたこと、京都帝大教授らとの個人的つながりを有していたことが、他の新聞社とは異なる規模の叡山講演会を可能にした要因であろう。

（2）大学側の協力姿勢

講師の主たる供給源となった京都帝大が、叡山講演会実施について好意的であったことは、「天声人語」から読み取ることができる。

講師の熱心は勿論、前京都大学総長木下氏、及び現総長代理久原氏も、満腔の同情を寄せられ、此の拳を以て聖代の美事とし、久原博士自身に出講せられたき意なるも、予算事務にて、其の意を果さず、頗る遺憾の旨を述べられたり。法科大学長井上博士も、医科大学長荒木博士も、自ら出講せられ、其の熱心の度懦夫をして起たしむるものあり（『大朝』明治40.7.22、p.2）。

理工科大学長であり、同年7月の木下廣次総長退任に伴い総長代理を兼務していた久原躬弦と、文科大学長の狩野享吉は不在だったものの³⁵、法科大学長の井上密と医科大学長の荒木寅三郎は登壇し、とりわけ荒木は第二期の4日間にわたって講演した。先行研究で明らかとなっており、当時京都帝大が学外での講演会活動に協力的であった背景には、①設立以来、初代総長木下廣次が京都帝大

を社会に開く意向を持っていたこと、②背景に帝国大学の閉鎖性に対する批判があったこと、③欧州留学経験のある教授陣によってUniversity Extension（大学拡張）への関心が高まっていたこと、④京都帝大の不振に対する打開策、等があった（山本2022：46）。

京都帝大の教授らは協力的な姿勢であったとはいえ、講演会の運営には気苦労も多かったようだ。講師接待役と開講前の各講師紹介係を務めた大朝の高原は、「頗る益するところも多かつた」一方、次のような苦悩があったことを語っている。

三週間のながきにわたる精進料理と、朝に夕に、入り代り立ちかはり、送り迎えせねばならぬ、天下の学者をもつて任ずる講師諸君の、天狗のやうな鼻息の荒さをそれぞれに御面相と学問の筋とによつて測定のうちへ、応接の言辞にまで用心してかゝらなければならなかつた苦悩とは、並大ていのことではなく、御陰で講演会満了のころには、下手の画がいた仙人のごとくに瘠せてもらつた（大阪朝日新聞社整理部編 1928：64-65）。

ところで、叡山講演会の前後に同様の試みをした読売新聞社と大阪毎日新聞社が、自らの取組を欧米のUniversity Extension（大学普及／大学拡張）に擬えていたのに対し、大朝は記事を読む限り、この言葉を前面に出してはいない。しかしながら、京都府立図書館長の湯浅吉郎（半月）が第一期直前の『大朝』で「英国あたりでは随分大学で此の種の会合をやるよ、元来英国の大学は概ね草深き田舎に散在して、倫敦市民の如きは大学の何物であるかを知らないから夏期休業を利用してユニバーシティー、エキステンションをやる、それが今回貴社の御催しと能く似て居る」（『大朝』明治40.7.28、p.3；下線は筆者）と述べており、他社同様にこの取組がUniversity Extensionに類するものと考えられていたことがわかる。また、叡山講演会の開会式で大朝を代表して開会の辞を述べた鳥居自身が、「世此の計画を表して叡山大学と云ふ〔。〕予は更に附加して叡山国民速成大学と言はんとす」（『大朝』明治40.8.2、p.3）と語っており、大朝では叡山講演会を「大学」に比する取組であると考えていたことがわかる。

5. 叡山講演会の意義：通俗的であることの価値

叡山講演会の後、京都帝大は「大学拡張」の言葉を掲げつつ学外者を対象とする教育機会の提供を本格的に開始するが、それは医術開業免状を有する者限定の京都医科大学講習科（明治41年設置）や、対象は限定しないものの一人の講師が連続して体系的に教える夏期講演会（明治43年設置）であり、専門性を志向するものであった。それらに比べると、叡山講演会は文学、法学、理学、工学、医学と様々なテーマを扱い、一人の講師が複数日にわたって講義する場合でも連続的かつ体系的とは限らず、あくまでも通俗性志向、すなわち「平易でわかりやすい」ことを旨とするものであった。

第一期に登壇した元第一高等学校長の今村有隣³⁶は、叡山講演会を以下のように評している。

講習会といふものも多いが、此の講演会のやうに東西大学の諸大家を招聘して、法・医・文・工、各種の学科を網羅した講習会といふものは殆どない、又其の会員には教員あり、学生あり、商人あり、軍人あり、法官あり、弁護士あり、僧侶あり、美術家あり、かくの如き多方面の人を集め得た講習会といふものも、世甚だ多からず、此の点に於て予は大阪朝日新聞の美筆を賛す (8.6, p.3; 下線は筆者)。

今村は、叡山講演会が各種学科を網羅したこと、聴講者が多方面にわたっていたことの二点を評価していたことがわかる。他にも、第一期の当初二日間は医学工学が優勢であったところ、三日目からは「医・科、工・科の両大学が拡張されて医、工、法、文の四分科を組織したといふ次第、会員は一日一日と其の方面の広まると、其の趣味の豊富となれるとに喜んでゐる」(8.4, p.3; 傍点は原文どおり) と、講演内容の広がりに対する聴講生の好反応も報じられていた。誰もが幅広く学べるのが通俗講談会の利点であった。

内藤湖南が大潮社員時代に京都帝大に通俗講談会の開催を求めていたことは既述のとおりであるが、その内藤が立場を変えて臨んだ叡山講演会での講演「日本満州交通略説」は『東洋文化史研究』³⁷に収められている。序文を寄せた羽田亨³⁸は、「此の一篇は実に先生の学究生涯の第一歩に印せられた記念」であり、同書の他の論考も含め「その内容は極めて専門的で、要するに深遠なる研究や、それに基づく見解を一般向きに平易な形式に於て発表せられたもの」(以上、内藤1936: 序1-2) であると述べている。そして、このような内藤の姿勢を「専門的研究の一般化」と特徴づけ、以下のように説明している。

此の専門的研究の一般化といふ特徴は、先生の学究生涯中に見出される一大特色といふべきで、多くの学者が始終研究法の堅塁に立て籠り、容易に一般人士をして近づき得ざらしめるやうな、所謂科学的研究の陣容を張ることに腐心する間に伍して、一方それと歩調を合せながら、別にまた研究の成果を巧妙なる談話に織込み、成るべく面倒な手続を省略して、何人にも領解せしめるやうに説述することにも長じて居られた。大学の教壇に講じられた所や、自ら筆を執つて草せられた論著は即ち前者に属し、本書に収むる所の大部分の如きは即ち後者に属する。この後の部類に於て、独り学界ばかりでなく、斯学に関心を有する一般人士の誘掖指導にも貢献せられたことの多いのは、恐らく想像も及ばぬところで、先生の世に立てられた大なる功績の一つとして数へなければならぬ (同上: 序2-3; 下線は筆者)。

内藤のこのような姿勢は明治・大正・昭和初期の大学教授にしばしば見られるものである。特定の専門について追究することの意義は言うまでもないが、一方で、職業、年齢(加えて性別も)を問わず、「斯学に関心を有する一般人士の誘掖指導」の意義も評価されてしかるべきであろう。

6. おわりに

明治40年前後という「通俗講談会」空白期に、それを相次いで再興したのは、日露戦争を経て発行部数を伸ばした新聞社であった。とりわけ大朝の叡山講演会は、規模において他紙を凌ぐものであった。

夏期に実施するものという意味では、叡山講演会以前にも、基督教青年会や仏教青年会による夏期学校・夏期講習会、あるいは文部省が夏期に実施する教員講習会は存在したが、①様々な専門領域の大学教授らが講師を務め、②特定の限られた属性だけでなく、広く多様な職業・年齢の聴講者を受け入れ（ただし女性は除く）、③1日だけではなく、複数日にわたって講義を行う、という点で、叡山講演会は成人教育としての夏期大学（夏期講習会）の嚆矢であったと言える。高原蟹堂が「おそらく日本最初の大規模の夏期大学であつて、今日でいふ「成人教育」の始めであつたらう」（大阪朝日新聞社整理部編1928：64）と振り返ったのは、あながち過大評価とは言えないだろう。大朝は叡山講演会を皮切りに、明治末から大正期にかけて朝日講演会・地方巡回朝日講演会を実施し、ライバルの大阪毎日新聞社も同様に明治41（1908）年夏の北陸巡回講演会以後、様々な講演会を実施するようになった。

これら新聞社の取組が、その後の明治末から昭和初期にかけての“大学拡張ブーム”の誘い水となったことは疑いない。新聞社の動きに追従するかのようになり、東京では明治20年代の大学通俗講談会の復活とも言える「学術講話会」が東京帝大の助教授・講師らを中心に発足し、第一回が明治42（1909）年10月9日に東京帝大内で開催され（『東亜の光』第4巻第11号、p.146）、京都では明治43（1910）年8月に京都帝大が夏期講演会を開始した。そして、明治44（1911）年5月、文部省に通俗教育調査委員会が設置され、11月に帝国大学総長、直轄諸学校長に対し通俗講演会の開催を促す文部次官通牒が発せられると、各地の高等教育機関で通俗講演会や講習会が広く開催されるようになった。大正中期になると高等教育機関のみならず、府県の社会教育行政も充実しはじめた。高原曰く、「近年では夏期大学と名のつくものが殆ど各府県に毎年開催されるやうになつたから、大いに喜ばしい現象としてわが社では特に自ら主催するをやめることになつた」（大阪朝日新聞社整理部編1928：64-65）とのことであった。

明治40年前後にUniversity Extension（大学拡張）という概念が広まり、定着する過程においては、大学・文部省だけでなく、新聞社をはじめ学外の様々なアクターが関わっていた。本稿はジャーナリズムの役割を明らかにするため大阪朝日新聞社に着目して論じたが、新聞社以外の様々な組織・団体の動向、そして大学本体の動向をあわせて検討することで、さらに詳しく大学拡張概念の定着過程を明らかにすることができるであろう。引き続きの課題としたい。

謝辞

本研究は科研費（25K05902）の助成を受けたものである。

付記

旧字体で記された漢字は、固有名詞を除き、原則として新字体で表記した。引用にあたっては、読みやすさに配慮し、適宜句読点を補った（補った箇所や筆者注は〔 〕で示した）。

注

- ¹ 東京帝大の大学通俗講談会は明治29（1896）年頃に消滅し、京都府教育会が京都帝大教授らを招聘して実施していた通俗講談会は、明治37（1904）年に中断された。帝大教授らを講師とする通俗講談会としては、他に学士会と東京学士会院が実施するものがあったが、学士会通俗学術講談会は明治36（1903）年の京都開催が最後であり、東京学士会院が明治19（1886）年から継続していた公開講演も、帝国学士院への改組に伴い明治39（1906）年に終焉した。
- ² 後に続く各社史においても「叡山講演会という催しによつて成人教育の先駆をなした」（朝日新聞社大阪本社社史編修室1953：450）等々と、記載されている。
- ³ 大阪朝日新聞は、新聞社の場合は大朝（括弧なし）、新聞紙は『大朝』（二重括弧付き）と記す（東京朝日新聞も同じ）。なお、叡山講演会は大朝主催であるため、記事が『大朝』に掲載されるのは言うまでもないが、『東朝』にも時々簡易な記事が載っていた。本稿では専ら『大朝』の記事を史料として用いた。
- ⁴ 例えば、叡山講演会初日の8月1日の最高気温は、大阪測候所（当時は大阪市堂島）が華氏92.2度（摂氏33.4度）であったのに対し、比叡山は華氏73.0度（摂氏22.8度）であった（『大朝』明治40.8.11、p.14）。比叡山の最高気温は8月でも華氏71～76度（摂氏22～25度）であった。
- ⁵ 例えば、新島編（1902：152）を参照。基督教青年会の夏期学校については、アメリカ合衆国におけるショトールカ運動に源流を辿ることができると考えられる。ショトールカ運動は19世紀末から20世紀初頭にかけての成人教育運動で、1874年、ヴィンセント（John Heyl Vincent）、ミラー（Lewis Miller）らによってニューヨーク州のショトールカ湖畔で日曜学校教師の研修集会をきっかけに始まり、次第に全国的規模に拡大した。日本へも紹介されており、例えば吉田熊次は次のように述べている。「米国のチョートークァ Chautauqua と云ふ処に於ては盛んに夏期講習会と云ふものが行はれて居る〔。〕チョートークァと云ふはニウヨークの南にある一の避暑の町であるが、それが冬の間は如何にも淋しき町であるに拘はらず、夏になれば三千人より一万人位な人が集つて種々なる講習があつて、さうして研究して居るのである。…（中略）…さうして其目的と云ふものは極く通俗的に教育を普及すると云ふ事と、又一方に於ては宗教の感化を弘めると云ふ二の目的より成つて居るのである。併し其の主眼とする所は教育の普及と云ふことを目的として居るものであります」（吉田1904：438-439）。
- ⁶ 仏教青年会の夏期講習会は、「此に余輩青年は夏期の休暇を利用し、清風明月の間、東西書生の連合を為し、門内の大徳を聘し醍醐の妙味を嘗めん、然るときは一は仏教を知ること愈深く、一は未知の良友に接するの便あらん」（『反省雑誌』第8年第5号、明治26.5.30、p.7；傍点は原文どおり）として始まった。叡山講演会と同様、講師による講演の他に、茶話会や運動の時間が設けられていた（同第8年第7号、明治26.7.31、pp.16-17）。
- ⁷ 元大朝社員で叡山講演会の講師の一人である内藤虎次郎は、大朝入社前年の明治26（1893）年夏、『亜細亜』に仏教青年会が鎌倉で開催した夏期講習会について記している（内藤1970：368）。
- ⁸ 根本中堂正面の石段を上ると文殊楼があり、反対側の石段を下ると目の前に山上宿院があった。文殊楼の西側石段下に根本中堂、東側石段下に山上宿院という位置関係である。佐藤佐『大日本建築全史附圖』文甄堂書店、

1933年、国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1218291> [2025年11月10日最終閲覧] の「第37図 比叡山延暦寺境内配置図」を参照。

- ⁹ 『叡山學院研究紀要』創刊号（1978年10月）の「創刊のことば」（頁数なし）より。
- ¹⁰ 滋賀県第一部（1905）の「第五二 学校」（p.33）より。
- ¹¹ 『天台』第41号（1906年9月14日）p.17、同第42号（1906年10月2日）p.22。
- ¹² 関西仏教青年会編（1908）、滋賀県教育会編（1915）、小財捨太郎編（1918）、日本青年館編（1924）、日本山林会編（1931）を参照。
- ¹³ 山上宿院は、その後増築されて、昭和35（1960）年頃には500人ほどが宿泊できたとのことであるが（京都新聞社編1962：49）、昭和41（1966）年に地下一階地上二階建て、650人収容の延暦寺会館へと建て替えられた（高桑1967：12）。
- ¹⁴ 帝大教授と軍人という講師編成は、日露戦争中に東京帝大で開かれた時局学術講演会でも見られた（山本2020：67）。
- ¹⁵ 追加された4人は、講演会開始後に大朝社員の要請を受けたと思われる。「今村有隣先生、一日猪之子医学博士と共に叡山に遊び、遂に我が会の為に生捕らる」（『大朝』明治40.8.11、p.13；以下月日と頁のみ）、「比叡山の所謂天幕村に避暑中の同志社教授テビス氏」（8.12、p.3）のようにタイミング良く比叡山滞在中だった例もあるが、新渡戸の場合は「〔筆者注：病気のため高知行を止めて〕大阪に着くと、何ぞ図らん待て居ましたと言はぬばかり、社員の方が二名参つて拙者を捕縛し、斯くも山まで護送されて来た」（8.16、p.3）、南條は「忙中なるに拘らず、本社の請を容れて、態態登山せられた」（8.17、p.3）と、やや強引な依頼もあったようである。
- ¹⁶ その他、表1には掲載していないが、大朝社員の石橋白羊が第二期の8月8日夜「日露戦争の実證を挙げつゝ、精神修養の必要なことを説き、引続いて新聞編輯雑談を述べ」（8.10、p.3）、土屋大夢は第三期の8月16日午後に「実地に見聞したる韓国事件当時の談話」（8.17、p.3）について講演した（いずれも『叡山講演集』未収録）。なお、石橋は明治44（1911）年の地方巡回朝日講演会では正規の講師となって講演している（小池編1911）。
- ¹⁷ 午後の開始時間は第一期当初は4時であったが、第二期には3時に繰り上がり、さらに第三期は1～2時に繰り上がることもあった。それに伴い、終わり時間も早まった模様。
- ¹⁸ 山上宿院の精進料理について、高浜虚子は何度も繰り返し「旨かった」（高浜1908：156）と述べている。
- ¹⁹ 京都帝大医科大学教授松岡道治は叡山講演会トップバッターとして初日に「人体を透視する方法」を講演したが、それは「昨年独逸より携へ帰れるエツキス光線の洋燈を机上に置き又エツキス光線に依てみたる尙俥病楊梅毒骨碎き等の数十余の写真を陳列し最新の学説と経験とに依り最も実験的なエツキス光線の説明をなしたり」（8.2、p.3）というものであった。
- ²⁰ 小池編（1907）や各社史の聴講者数は一致しておらず、表記に揺れがあるが、『大朝』明治40.8.5、8.11、8.17に掲載された人数の合計は640人である。
- ²¹ 総務庁統計局監修、日本統計協会編集・発行『日本長期統計総覧』第1巻（1987年）の「参考3-5-a 産業別有業者数（明治39年～大正9年）」（pp.452-453）を見ると、明治40（1907）年の全有業者数は2507万2500人で、そのうち農林業は1476万900人、全有業者の58.9%を占めている。また、明治40年の総人口は4741万6000人（「2-1 男女別人口、人口増減及び人口密度（明治5年～昭和60年）」、同上、pp.48-49）であり、農林業従事者の総人口に占める割合は31.1%となる。いずれにせよ、農業を職業とする者の聴講は極めて低調であったことがわかる。
- ²² 同記事は『天台』第51号（1907年9月14日）に「志賀朔川氏の叡山紀行《銷夏日記の一節》」（p.16）として一部再掲されている。内藤正明の年齢は陸軍省『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿：明治31年7月1日調』（1898年）が「五十二年十一月」となっていることから推測した。
- ²³ 庭球は末廣重雄もお気に入りだった。「毎朝、根本中堂前のテニスコートにゆき見れば、未だ曾て末廣法学博士

の球を弄ぶを見ざるなし、最後の講演、講壇に上りて誤つてコップを落す、博士則ち会員を顧りみて曰く、余りテニスをやつたので、手が利かなくなりましたと、満堂哄笑、また好愛嬌といふべし」(8.11、p.13)と報じられた。

- ²⁴ 四明嶽は、叡山ロープウェイ比叡山頂駅近くのガーデンミュージアム比叡に位置している。徒歩時間の目安は比叡山ハイキングマップ (https://www.hieizan.gr.jp/design/pdf/hieizan_hikingmap.pdf [2025年11月10日最終閲覧])を参照。ただし当時は現在とは異なるルートであったと思われる、もう少し時間がかかった可能性が高い。
- ²⁵ 『大朝』には号しか書かれていないため、大阪朝日新聞社整理部編(1928)をはじめとする大朝の刊行物によって本名と号との対応関係を調べた。なお、確定できなかった人物に、松茵(速記者の吉田松茵か?)、黙仙(口絵画家の黙仙か?)、重人(大朝社員の熊田重人か?)がいる。
- ²⁶ 明治8(1875)年福岡県生まれ、昭和21(1946)年没。明治34(1901)年東京帝国大学文科大学哲学科卒、明治39(1906)年京都帝国大学法科大学経済学科卒。同年大朝に入社、経済部長、取締役、編集局長、大朝主筆(のち名誉主筆)を歴任。主な著書に『極北日本』(政教社、1912年)、『戦時経済百面観』(文雅堂、1918年)、『北半球一周』(文雅堂、1919年)。高原の経歴は常安編(1971)の年譜(pp.98-106)参照。なお、高原は、この叡山講演会での活躍により、鳥居素川に見込まれたという(常安1971:55、88、100)。
- ²⁷ 例えば、明治40(1907)年の夏目漱石の東朝入社は、池辺、鳥居の両者の尽力によって実現したものであった(朝日新聞社1969:248)。
- ²⁸ 同じ文章が『明治文学全集91』に収められている(西田1979:283-284)。
- ²⁹ 鳥居は熊本の済々黌(独逸学科あり)で学んだ後、上京して独逸学協会学校に在籍していた。
- ³⁰ 叡山講演会の翌年、明治41(1908)年に東朝が主催した朝日講演会は、池辺三山の企画であった(笠1963:290)。池辺が鳥居の企画の成功に刺激されたという可能性が考えられる。
- ³¹ 内藤の一回目の大朝入社は、『内藤湖南全集』第14巻の年譜(p.661)では明治27(1894)年7月だが、『朝日新聞社史:明治編』(p.286)、『朝日新聞社史:資料編』(p.455)では明治27年9月となっている。
- ³² 内藤の京都帝大人事は難航したことが知られている。『内藤湖南全集』第14巻の年譜(pp.663-664)によると、明治39(1906)年12月19日、内藤は狩野亨吉に東京で面会し京都帝大教授就任を承諾、明治40(1907)年1月には大阪から京都へ転居した。5月に文科大学史学科が開設され、9月に開講したものの、内藤の教授就任の件は法制局が学歴(明治18年秋田師範学校高等師範科卒)を理由に難色を示した。狩野は当時を振り返って「内藤湖南氏の教授任命について東京側に交渉し、法制局で穂積陳重氏と大いに折衝した」(京都帝国大学文学部編1935:169)と述べている。10月によりやく文科大学講師を囑託され(『官報』明治40.10.23、p.12)、東洋史学講座を担当することになったが、教授に任じられたのは2年後の明治42(1909)年9月15日付であった(『官報』明治42.9.16、p.8)。千葉三郎は「学歴、学閥に支配された当時、大学出でもない在野の者を天下の帝国大学教官に招聘することが、いかに難事だったか」(千葉1986:316)と述べているが、内藤の京都帝大着任は異例の抜擢人事であった。
- ³³ 同じ文章が『内藤湖南全集』第3巻に収められている(内藤1971:268-270)。「十余年前、東京に於て、屢次一ツ橋の講義室に開かれたる通俗講談」は東京帝国大学(当時は「帝国大学」)の大学通俗講談会のことであろう。なお、『大朝』は「商推」とあるところが『内藤湖南全集』では「商推」となっているが、後者の方が正しいと推測されるため、修正した。
- ³⁴ 鳥居と内藤は、明治37(1904)年1月5日に『大朝』に「天声人語」欄が誕生した時の初代執筆者であった(荒垣1955:226-227)。なお、「天声人語」の名付け親の西村時彦(天囚)も、内藤同様、後に京都帝大講師になった。
- ³⁵ 翌々日には「久原総長代理曰く叡山の大講習会中々に思附が面白い私は大賛成である……御存知の通当大学の事務が中々に多忙で半日の閑もない位会場に出馬する事は出来ぬ困つた事だ」(『大朝』明治40.7.24、p.3)という久原の談話も掲載された。狩野は内藤の人事の件を含め、9月の史学科開講に向けて多忙だったものと推測される。
- ³⁶ 今村有隣は、前任の狩野亨吉の京都帝大初代文科大学長就任に伴い、後任として第一高等学校の事務取扱、のち校長を務めた。今村の次の校長が新渡戸稲造(東京帝大農科大学教授と兼任)であった。

³⁷ 『東洋文化史研究』（羽田亨の序を含む）は『内藤湖南全集』第8巻に収められている（内藤1969：1-262）。

³⁸ 羽田亨は内藤湖南らと共に京都帝大東洋史学の黄金期を築いた。のち京都帝大第12代総長。

参考文献

赤松円麟『比叡山写真帖』延暦寺事務所、1912年

朝日新聞大阪本社社史編修室編『村山龍平伝』朝日新聞社、1953年

朝日新聞社編『五十年の回顧：大阪朝日新聞創刊五十周年記念』1929年

朝日新聞社史編修室編『上野理一伝』朝日新聞社、1959年

朝日新聞社社史編修室編『朝日新聞七十年小史』朝日新聞社、1949年

朝日新聞社社史編修室編『朝日新聞の九十年』朝日新聞社、1969年

朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史：明治編』朝日新聞社、1990年

朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史：資料編』朝日新聞社、1995年

荒垣秀雄編『朝日新聞の自画像』鱒書房、1955年

伊豆富人「鳥居素川」伊藤金次郎・伊豆富人・荒畑寒村『三代言論人集』第7巻、時事通信社、1962年、pp.141-249

大阪朝日新聞社整理部編『新聞記者打明け話』世界社、1928年

関西仏教青年会編『比叡山仏教講演集』1908年

京都新聞社編『比叡山・琵琶湖』河出書房新社、1962年

京都帝国大学文学部編『京都大学文学部三十周年史』1935年

小池信美編『叡山講演集』大阪朝日新聞社、1907年

小池信美編『朝日講演集』第1輯、朝日新聞合資会社、1911年

小財捨太郎編『国産奨励会主催比叡山講演集』国産奨励会、1918年

小宮一夫「池辺三山—東京朝日新聞を飛躍・発展させたサラリーマン主筆」土屋礼子・井川充雄編『近代日本メディア人物誌：ジャーナリスト編』ミネルヴァ書房、2018年、pp.67-74

佐藤佐『大日本建築全史』附圖、文翫堂書店、1933年

滋賀県教育会編『叡山講演集（滋賀縣教育會雜誌臨時増刊）』1915年

滋賀県第一部『明治三十六年滋賀県統計要覧』1905年

総務庁統計局監修、日本統計協会編集・発行『日本長期統計総覧』第1巻、1987年

大日本山林会編『大日本山林会史』1931年

高桑義生『新・京都歳時記1：洛北篇』光村推古書院、1967年

高浜虚子『新写生文』東亜堂、1908年

- 千葉三郎『内藤湖南とその時代』国書刊行会、1986年
- 常安弘通編『蟹堂高原操先生』高原操顕彰会、1971年
- 富田啓一郎『大正デモクラシーと鳥居素川：評伝』熊本出版文化会館、2017年
- 内藤虎次郎『東洋文化史研究』弘文堂、1936年
- 内藤虎次郎『内藤湖南全集』第1巻、筑摩書房、1970年
- 内藤虎次郎『内藤湖南全集』第3巻、筑摩書房、1971年
- 内藤虎次郎『内藤湖南全集』第8巻、筑摩書房、1969年
- 内藤虎次郎『内藤湖南全集』第14巻、筑摩書房、1976年
- 新島源介編『中央学生基督教青年会史』中央学生基督教青年会、1902年
- 新妻莞『新聞人・鳥居素川』朝日新聞社、1969年
- 西田長寿編『明治文学全集91：明治新聞人文学集』筑摩書房、1979年
- 日本青年館編『財団法人日本青年館ノ事業：自大正十二年七月至大正十三年三月』1924年
- 山本珠美『近代日本の大学拡張：「開かれた大学」への挑戦』学文社、2020年
- 山本珠美「大学拡張と新聞社—大阪毎日新聞社と京都帝国大学による「北陸巡回講演会」を例に—」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』15号、2022年、pp.43-62
- 山本珠美「明治30年代の「大学を開く」思想—University Extension概念の定着過程に関する一考察—」『青山学院大学教育人間科学部紀要』14号、2023年、pp.39-57
- 山本珠美「大学拡張と新聞社—“社会教育新聞”としての読売新聞における足立北鷗の試み—」『青山学院大学教育人間科学部紀要』15号、2024年、pp.13-36
- 吉田熊次『現今の教育及倫理問題』金港堂、1904年
- 陸軍省『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿：明治31年7月1日調』1898年
- 笠信太郎「池邊三山」小野秀雄・阿部賢一・笠信太郎『三代言論人集』第6巻、時事通信社、1963年、pp.233-346